

5. 被災自治体及び受入自治体の具体的な業務～浪江町及び二本松市における対応～

広域避難を余儀なくされた浪江町、並びに避難者を受け入れた二本松市における福島第一原発事故に対する対応について、①地震発生から二本松市に避難するまでの対応（3月15日頃までの動き）、②二本松市での1次避難所の運営等に関する対応（3月15日頃から1カ月後までの動き）、③2次避難所の対応以降（1カ月後以降）、の3つのフェーズにわけて、ヒアリング調査結果を以下にまとめる。

なお、浪江町における東日本大震災での被害状況並びに平成25年8月14日時点における状況については、【参考】のとおりである。

5-1. 地震発生から二本松市に避難するまでの対応（3月15日頃までの動き）

（1）浪江町

① 地震発生初期の対応

地震発生後は、津波警報が発令されたことにより、住民の避難誘導を行うとともに、インフラ施設の被害調査を行った。避難誘導の担当は、間一髪で津波から逃れる状況であった。なお、浪江町職員については、職務中の死者はいなかったが、休暇中で亡くなった方が1名いた。津波が襲来した当初は、海岸近くの体育館や高台の避難所に住民を避難させて、被災者支援の対応を行っている。

② 津島支所への避難

3月12日5時44分の福島第一原発から半径10km圏内の避難指示をテレビ報道で確認した後、同日朝に行われた災害対策本部会議において、津島支所への避難を決定し、3月12日の13時から夕方までに、災害対策本部の移転を行っている。

住民に対する周知は、防災行政無線のみであった。電話等の通信が使えなかったことから、消防団員や民生委員、行政区長に対して、地域住民への避難誘導を依頼することもできなかった。また、福島第一原発の爆発の危険性が迫っていたので、町職員が避難誘導のために地域をまわることもできなかった。そのため、かなりの町民が、役場周辺地域に残っていたものと推測される。

なお、津島支所までの移動手段がない住民については、一先ず役場に来てもらい、バスで移動してもらった。通常であれば30分程度で着くところを、大渋滞のために3時間程度の時間を要した。



写真 2-1 津島地区への避難状況

② 津島支所からの避難の呼びかけ

津島支所についてからも、一部の町職員は、自衛隊とともに何度も役場周辺地域に戻り、残っている住民に対して避難の呼び掛けを行った。二本松市東和支所に移動する3月15日以降も、町職員8名は、20km圏内に取り残された住民の避難を支援している。

③ 二本松市東和支所への避難

二本松市東和支所（以下「東和支所」）への避難は、3月15日の10時に決定された。二本松市とは協定を結んでいたわけではなかったが、浪江町と隣接していたため、二本松市を避難先を選んだ。なお、二本松市への避難受入れについては、浪江町長及び浪江町議会議長が二本松市長に直接会いに行ってお願ひしたものである。

避難が切迫していたことから、住民への周知は、「二本松市に避難してください」といった内容のみであった。そのため、住民は二本松市役所に直接行ってしまい、大混乱となった。本来は、東和支所に行つて欲しかったため、町としては、周知内容をより正確にすべきであったとの認識を持っている。



図 2-6 浪江町役場・津島支所・二本松市役所・東和支所の位置図

(2) 二本松市

① 地震発生初期の対応

3月11日、二本松市では震度6弱の揺れに襲われ、15時過ぎに災害対策本部が設置された。すぐに、各担当課が所管する施設について、現地に行つて被害確認を行うとともに、4階会議室で災害対策本部会議を行った。

庁内は停電となったために非常電源を使用する予定であったが、電源の入る場所が限られていたため、発電機を使用して、テレビ等から情報を得た。この際、地上デジタル対応のテレビは映らなかった。詳しい原因は不明だが、庁内全体で受信するアンテナ装置が停電したために、動かなかったのではないかと推測されている。一方、アナログテレビについては、アンテナを窓の外に持っていったら映ったため、そのテレビを使って情報を入手していた。なお、電気が復旧するまでに3～4日を要したが、それまではアナログテレビで対応している。

② 地震発生による避難所開設

地震当初、線路を挟んで南側は停電となったが（市役所も南側に位置）、逆に北側は停電にならなかったことから、市全域で避難所を開設する必要は無かった。停電となった地区の住民センター（公民館）を避難所として開設した。避難所の開設は、各センター長が行ったが、その後、炊き出し等については地域住民が中心に行っている。

3月11日の夕方から夜にかけて、市内にある岳温泉から、停電で食事の準備が出来ないとの理由で、温泉の宿泊客の対応について連絡があった。この時点で、市内の被害が特に無いことがわかっていたことから、市役所の災害対応業務は、岳温泉の宿泊客への食事等の対応が中心となった。

まず、宿泊客については、安達太良体育館を避難所として用意し、200～300人程の宿泊客を避難させた。停電になっていない住民センターの調理場を使って、岳温泉客用の炊き出しを行うこととした。その後、特に大きな被害も無かったことから、宿泊客は、翌日3月12日には、自家用車や観光バス等で帰宅の途に就いた。



図 2-7 二本松市役所・岳温泉等の位置図

③ 3月12日から数日の状況

当初、二本松市の主な対応は、市内のライフライン等の復旧がメインで、そこまでの被害が出なかったことから、市民からの問い合わせもほとんどなかった。避難所に来た方も、停電のために来た方がほとんどであったため、復旧すると自宅に戻っていた。

しかし、3月12日の福島第一原発1号機の爆発以降、浜通り方面からの車がコンビニや公園の駐車場に止まり始めた。ただし、この頃は、線量の情報もなく、どちらに風が流れているかもわからなかったため、二本松まで放射能が来る危機感は薄かった。